

## 第30回中世哲学大会シンポジウム報告

### 論題：アウグスティヌスにおける 知識と信仰

司会 東洋大学 泉 治 典

提題：理性と權威

国際基督教大学 岡 野 昌 雄

提題：アウグスティヌスにおける信仰と知解

関西学院大学 宮 谷 宣 史

提題：アウグスティヌスに於ける信仰の知解について

南山大学 宮 内 璋

(於 広島大学 1981. 11. 15)

司会

泉 治典

アウグスティヌスにおける知識と信仰の問題は、故長沢信寿氏の独創的な解釈（『アウグスティヌス哲学の研究』所収）以来多くの研究者によって探究されて来たのであるが、この問題はその大きさ・深刻さにおいて西欧思想史上、実に第一級のものである。今回三人の提題者によってこれが根本的に論ぜられ、かつまた活発な質疑応答が展開したことは、本学会の前進のためにも悦ばしいことであった。

岡野昌雄氏は初期アウグスティヌスの精神的発展に即しながら問題を設定され、次に宮谷宣史氏がこれを受けて、主としてその後の展開・変容を明らかにされた。最後に宮内璋氏は、この複雑な、すなわち相互に限定し制約しつつ展開する道程を、正にその現実において受け取り切り開いて行く悪戦苦闘のさまを示して、これへの応答とされた。

こうして三氏の提題は、歴史的展開と事柄自体の解明とをもってテーマに応えられたのであるが、期せずして得られたこの応答は、正しく〈信と知〉の問題位相を提示したのと言ってよい。なぜなら、ここでは正に〈歴史と真理〉が最も大胆な

形で問われるに至ったからである。アウグスティヌスが信と知の究極の一致を内に抱いたことが、三報告によって明らかにされている。岡野氏は、それが権威と生の究極目的とでもって囲まれているという構造を示されたが、実にこの囲みを置くこと自体に、マニ教と対決するアウグスティヌスの悪戦苦闘があったと言い得る。宮谷氏と宮内氏とは、アウグスティヌスがやがてこの構成を内側から把えて行くに至ったことを明らかにされたものと思う。宮谷氏はこれを主として信の側から、宮内氏は知の側から把えんとされた、と言ってよいであろう。これはいずれもアウグスティヌスの強い意志活動を伴っていることが示されたのであるが、宮内氏が結論的には岡野氏の示した枠組の構造を変えて、〈権威〉を始めにというよりも最後に、そのうらわしき姿において現出せしめんとされたことは印象的であった。

多数の質疑を正確に記録することは困難であるが、あえてまとめることを許していただけるならば、中心問題は、信の知への内在、つまり知における信の現実化が可能であるかどうか、可能ならばそれはどんな形においてであるか、ということであったと思われる。知は自ら活動し、自ら根拠に至らんとする。それは内に欠除を持ちそれ故充足を求める知の現実にはかならない。他方、権威によって立ち、それ故欠如を持つも、自らは充足しえず、権威に帰ってそれをになって行く信は、自らを知において把えんとする時、知のこの現実に深く関わって、その欠如と充足はキリストの卑賤と高挙において原型的に先取されていることを示す。これがアウグスティヌスにおける信と知の〈型〉であったと言えよう。岡野氏が最後に言われたように、「人間理解の問題」がここで初めて据えられたのである。そこで、アウグスティヌスにおいては、(1)知は高慢と謙虚の区別をやがて知るに至った。それは肉体からの逃亡とは異なる型の浄化である。信の現実化としてこのことが第一に言われねばならぬ。かかる意味で浄化は人間にとって habitus ではありえない。(2)知における信の現実化として〈探究〉および〈解釈〉ということが生じた。これは〈根拠の開示〉としての知とは異なるあり方である。(3)しかしこの二つにおいても、アウグスティヌスの場合、知の働きの二様相が具体的にはどう限定されるかの問題を残している。それ故「知における信の現実化」というよりはむしろ「信における知の現実化」というべきものがあり得るのではないか、と問われる。すなわち、「信仰は理性を準備する」「信仰は精神を浄める」ということは少くとも直接的には条件

とされない知の在り方が可能ではないか、という問いである。これはアウグスティヌス以後より明瞭となる神学的理性 (intellectus fidei) の問題でもあり、先に立てられた「人間学」のさらなる根拠を問うものであると言える。——こうして〈知識と信仰〉のテーマは、アウグスティヌス自身の苦悩のさまを今日のわれわれに見せると共に、以後負い続ける問題にわれわれ自身どう関わっていくかをきびしく問うものであったと言ってよいであろう。それ故、時にはげしく争われ、時に錯綜の迷路に踏み込んだ今回のシンポジウムは、明日への活動のよき源泉となったことを信じて疑わない。

---

## 提題

## 理性と権威

岡野昌雄

アウグスティヌスにおける知識と信仰の問題の発端は、彼のマニ教経験に深く関わっていると思われるが、その問題がどのような状況の中で生まれ、どのように展開して行くかを、特に彼の初期著作を中心に辿ってみたい。なおここで初期というのは、彼の回心から司祭叙任まで、すなわち386年から391年までの6年間を考えている。

(1) アウグスティヌス自身の説明によれば、知識と信仰の問題はマニ教入信に際して理性と権威の対立という仕方では自覚されるようになった、つまりこの問題が入信動機の大きな要因の一つであったということである。マニ教徒は、カトリック教会のように理性よりも先に信仰を命じるのは迷信であると非難し、自分たちは権威への信仰を強要せず、理性による知識を与えると言言していたが、アウグスティヌスはこの約束に魅かれてマニ教徒の仲間に加わったと述べている(『至福の生』1, 4:『信仰の有用性』1, 2)。

ケケロの『ホルテンシウス』によって知恵の愛、すなわち哲学に目覚めさせられたアウグスティヌスは、幼時から教えられていたキリスト教信仰のうちにそれを求めるが、聖書はまるで老婆の語るおとぎ話のようであり、それを批判するマニ教徒の主張がもっともらしく思われた。ここで彼が求めていた知恵は、人間を究極的に